2009/06/29　コミュナリズムの予兆(7)
2009/06/27　コミュナリズムの予兆(6)
2009/06/25　コミュナリズムの予兆(5)
2009/06/23　コミュナリズムの予兆(4)
2009/06/22　コミュナリズムの予兆(3)
2009/06/21　コミュナリズムの予兆(2)
2009/06/20　コミュナリズムの予兆(1)
2009/06/19　ネパールの治安悪化とテロリズム
2009/06/18　皆さん，よい人なのに‥‥
2009/06/17　No name's space: MSN 巨大化の陥穽
2009/06/16　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(8)
2009/06/15　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(7)
2009/06/14　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(6)
2009/06/13　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(5)
2009/06/12　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(4)
2009/06/11　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(3)
2009/06/10　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(2)
2009/06/09　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(1)
2009/06/03　「インドの衝撃(2)」に衝撃なし
2009/06/02　既視感と懐旧

2009/06/29

コミュナリズムの予兆(7)

谷川昌幸(C)

7

コミュナリズム(宗教対立主義)は，南アジアでは，日本では想像もできないほど深刻な問題であり，今回の教会爆破事件についても，盛んに議論されている。この場合，人々の本音がよりよく分かるのは，新聞記事などよりも，むしろ投稿やブログなどである。

たとえば，Republicaブログのデワカル・チェットリ「教会爆破犠牲者」記事についての投稿は，6月29日現在，33通に上る。チェットリ氏か編集部が多少取捨選択しているのだろうが，なかなか水準が高く，しかも本音がストレートに語られており，興味深い。以下に，典型的なものをいくつか紹介する。（紹介文は意訳。RepublicaはややNC=ヒンドゥー教寄りの新聞。）

■5/29　vivek rai
何も悪いことをしていないのに爆殺するのは，許し難いことだ。これは，わが国が宗教対立に向かう兆しだ。イラクやパキスタンのようになってはならない。

■5/31　kanagawa（神奈川）
このネパール教会の惨事は，この国で進行している根深い問題――強制的改宗と金銭による改宗――を表面化させた。多くの宣教師団が政党を買収し政策を変えさせた。この国のヒンドゥー教徒や仏教徒は一般に寛容で誰にでも好意的であるのに，露骨なキリスト教福音伝道がその彼らを激怒させはじめた。いまでは彼らは，宣教師団が彼らの優しさにつけ込み，この国の古来の文化を公然と掘りくずしている，と感じている。

■6/2　Johan
国内で起こっている混乱の最後のものが宗教的不寛容だ。わが国は世俗国家を宣言したが，それで生活がどう変わったのか?　教会やモスクのような宗教寺院に爆弾を仕掛けるのは，残念ながら，ヒンドゥー教社会の外部社会に対する宗教的不寛容を示すものだ。こんな事をしても，ネパール国民の直面する危機の解決にはならない。皆で協力し，この国の社会的，経済的，宗教的向上に努力しようではないか。

■6/2　Aryan
ヒンドゥー教は，兄弟や姉妹が数千ルピーでキリスト教に誘い込まれるのを座視するほどに，寛容であった。神聖な寺院の爆破は言うまでもなく反人間的ではあるが，しかしキリスト教会も，彼らの改宗政策がヒンドゥー教活動家を攻撃的にしてしまったことを反省すべきだ。

■6/3　Prabhakar
私は20年以上前にカトリック信者になったあとも，ヒンドゥー教徒，仏教徒，イスラム教徒を尊敬し，彼らの近くで生活してきた。教会は，私が知る限り，他宗教からキリスト教に改宗させるため，人々に金銭を与えるような政策は採っていない。残念ながら，ある種の経済的利益を理由に宗教を変える人が何人かいることは事実だ。しかし，だからといって，このことの故に教会が非難されるべきではない。教会は，イエスとその教えを宣べ伝えてい

る。そこには何の問題もない。それに，私自身，子供の頃は，マハバラータやラーマヤーナを観て楽しんでいた。相互理解すれば，宗教の調和は実現する。もしそうでなければ，われわれ全ては，破滅だ。

■6/3　Aryan
プラバカルさん，多くの人々，とくに下位の人々がキリスト教に釣られていく実例は多数ありますよ。キリスト教の（まるで商品販売のような）訪問販売員がたくさんいます。週末に家に居ると，彼らが訪れ，キリスト教へと勧誘する。皮肉なことに，彼ら自身はキリスト教のことなどよく知りもしないのですが。

■6/3　Hutali（独）
キリスト教宣教師団系の学校や病院に行けば，露骨な改宗勧誘とは何か，なぜ地域住民が怒っているのかが，よく分かる。子供たちは，自分の育ってきた寛容の文化の否定を教えられ，洗脳され，改宗させられる。患者たちは，病気は宗教のせいだとあからさまに告げられ，治りたければキリスト教に改宗せよと迫られる。宗教的調和とは，そんなものなのか?
　それは，寛容を本質とするヒンドゥー教文化・仏教文化の露骨な搾取にほかならない。

いったいなぜ，これらの狂信的宣教師たちは，かくも他者の改宗に熱心なのか?　彼ら自身がワナに誘い込まれてしまったので，「救い」を得るため，同じワナに他の人々をもっともっと誘い込まざるを得なくなったのか?

西洋の教育ある人々は，ヨガ，ヴェーダ，アーユルヴェーダ，仏の教え，そして，一般に，ヒンドゥー教や仏教の教えがもたらす内面の幸福を発見し，それらに傾倒しつつある。宣教師たちは，キリスト教へのこの関心の喪失を埋め合わせるため，教育のない人々を捜し回っているのではないか?

宣教師たちは，本来寛容であった社会に社会的対立の種をまいているのだ。

■6/4　John
結局，改宗が生活向上をもたらすなら，そうしてなぜいけないのか?　当人が決めればよいことだ。それはいけないと思う人は，強制ではなく，説得を試みればよいのだ。

■6/4　Prakash
キリスト教伝道に対し立ち上がらなければ何が結果するかを見よ――ラテン・アメリカだ!
　インカのような素晴らしい社会があったが，宣教師たちに対し寛容でありすぎた。ラテン・アメリカのほぼ全ての地域は，完全に自分たちの宗教を失い，文化を失い，生活を失い，結局，自分たちの言語すらも失ってしまった。手遅れになる前に，よく監視せよ!

■6/11　Arun
世俗主義は，国家が宗教と結びつかず中立である，ということを意味する。世俗主義だからといって，宗教が金銭や影響力や力でもって出来ることは何でも自由にしてもよい，ということではない。他国社会の感情を害する行為や活動は，許されない。また，世俗主義は，自由な同意による改宗を意味するわけでもない。改宗させることは，過去・現在・未来において犯罪である。ネパールで一般的な哲学は，広義のヒンドゥー教と仏教だ。その意味で，われわれはみなヒンドゥー教徒であり仏教徒である。もしそのような宗教的平安を乱すなら，教会爆破のような事件は今後も続くだろう。ネパール版BJP,RSSが出現する。選択はわれらにある。

■6/13　Binod
教育がない者がキリスト教に改宗すると考える人々は，最も無知で最も不寛容な人々だ。カースト制の中でしか，ものを考えられない。下位カーストの人々は，自分たちのように知的ではないと思い込んでいる。南アフリカ黒人が解放されたように，下位カーストにもその時が来るだろう。

■6/14　Kasama
ネパールでは，教育のないのは，下位カーストだけではない。教会は，カースト制を道具として利用し，自分たちの優越性を示そうとする。西洋での人種差別と同様，ネパールでもカースト制は違法だ。カースト制は存在するかもしれないが，それを布教に利用することは出来ないはずだ。今日の西洋では，教会こそがゲイや移民や世俗主義に不寛容であり，はるかに差別的だからである。

■6/15　Subba
いずれにせよ，選択するのは，あなただ。誰も，教会やモスクや寺院に行くことを強制できない。あなたが選択し，よいと思った道を進めば，それでよい。

■6/15　Concerned Nepali
教会を爆破した人々は，口実さえあれば，明日にでも寺院を爆破するだろう。それなのに，いったい誰を非難しようとしているのか?　イスラム教徒か，ユダヤ教徒か，キリスト教徒か?　爆破の理由は，政治的なものであって，それ以外の何ものでもない。

■6/15　Binod
キリスト教の核心は，人は自由な存在であり，神ですらそこには介入しない，という点にある。だから，ネパール人たちがキリスト教を選ぶなら，それは彼らが望むものを選ぶ権利を持つからであり，それは西洋人が彼らの選ぶ宗教を選ぶのと何ら変わりはない。もしアメリカ人がヒンドゥー教徒になっても何ら問題がないとすれば，ネパール人がキリスト教徒になることを，なぜそれほど恐れなければならないのか?

8

以上の投稿を読むと，キリスト教布教問題についての論点がほぼ出され，議論されていることが分かる。難しいのは，キリスト教会側にも反教会側にも，もっともな言い分があるからだ。一刀両断とはいかない。

また，この問題は，「kanagawa（神奈川）」という名の投稿があるように，日本とも無関係ではない。投稿が日本人かどうかは分からないが，日本の教会がネパールに相当深くコミットしてきたことは，たしかである。異宗教・異文化社会への布教の問題は，日本の問題でもある。

むろん，どのような社会も固定したものではなく，他社会との関係の中で多かれ少なかれ変化していく。ヨーロッパもインドも日本もそうだ。その変化は，21世紀の現在において，どうあるべきか?　これは，ヒンドゥー教社会の側も，そこに入りつつあるキリスト教会の側も，よく考えるべきだろう。

そうしないと，このままでは本格的なコミュナル紛争となり，自爆攻撃が始まり，悪循環が止められなくなり，ネパールは長きにわたって塗炭の苦しみを舐めることになりかねない。

(参照) Church bombing victims
http://myrepublica.com/blogs/blog/2009/05/26/sunmaya-didi/

12:10 | 固定リンク | この記事を引用 | 宗教
2009/06/27

コミュナリズムの予兆(6)

谷川昌幸(C)

6

このカトリック被昇天教会爆破に対する抗議行進が，5月31日，カトマンズなど，全国で実施された。（UCAN=Union of Catholic Asian News, June 2）

カトマンズ行進を呼びかけたのは，Isu Jung Karki牧師。あいにくの豪雨にもかかわらず，カトリック3000人(3教区)，プロテスタント4000人(150教会)の計7000人が参加した。ちなみにキリスト教徒は150万人，そのうちカトリックは7500人(2009年)。 このカトマンズ抗議行進には，ヒンドゥー教徒やイスラム教徒も参加していた。

大惨事後の行進であったが，キリスト協会側の抗議は抑制されたものであった。また「世界ヒンドゥー協会・ネパール」のDamodar Gautam会長やイスラム教指導者のNazarul Hussain氏も，事件後直ちに，この爆破を非難し，キリスト教徒との連帯を表明していた。

しかし，それにもかかわらず，爆破事件に対する教会側の発言や抗議行進が「政治的」色彩を帯びることは，避けられない。いくつかの発言を見てみよう。

■S. ボガティ神父(被昇天教会)
「なぜ攻撃されたのか分からない。ネパールのカトリック教会は社会のためになることを常に行ってきた。われらは，どのような集団や社会の感情をも決して害するようなことはしてこなかった。」（UCAN, May 25）

■A.シャルマ司教(被昇天教会)
「ネパールのカトリック教会は，貧者や救いの必要な人々のために奉仕してきた。教会が攻撃される理由はなかった。礼拝の場は常に敬意を払われ，決して攻撃されてはならない。‥‥行進はキリスト教諸派や他宗教の人々の間に統一があることを示した。」（UCAN, June 25）

■レプチャ氏(カトリック教徒)
「［ヒンドゥー教過激派は，ネパールのカトリック教会の自制的な態度を利用してきた。］この行進は，カトリック教会は暴力攻撃を許さないこと，教会の諸権利を守るため立ち上がることを知らしめた。」（UCAN, June 25）

■J.カルキ牧師(プロテスタント)
この抗議行進は「行われるべきもの」であり，「世俗国家に反対する人々への当然の応答」

である。（UCAN, June 25）

以上の発言は，抑制されたものである。しかし，宗教問題が難しいのは，そうした発言であっても，敵対者には，許し難い自己正当化と取られてしまうことだ。

「貧者や救いの必要な人々への奉仕」それ自体が，無神経な傲慢発言とされかねないし，「ネパールのカトリック教会の自制的な態度を利用」や「教会の諸権利を守るために立ち上がる」は，攻撃的本性の暴露とさえ映るだろう。

ましてや，「世俗国家に反対する人々への当然の応答」ともなれば，その政治性は明白である。キリスト教会が，布教拡大のため「世俗国家」擁護の政治運動を始めた，と取られてしまうのである。

あるいは，次のような報道もある。「カトリック筋によると，NDAは元兵士，元警官，マオイスト・ゲリラ犠牲者から構成されていると考えられている。NDAは，共産主義者・キリスト教徒・イスラム教徒と戦うため自爆攻撃の訓練をしてきたという。」(BonsNewsLife, June 13)

この「カトリック筋」が誰かは分からないが，UCAN(June 1)がこの内容の記事を掲載しているので，カトリック側の発言には違いないだろう。

NDAが自爆攻撃を準備している，というのは本当かもしれない。しかし，キリスト教会側が，それを言い出すと，歯止めが利かなくなる。

ブッシュ政権は，自爆攻撃への反撃をアフガンにおける「十字軍の戦い」と呼び，イスラム圏の猛烈な反発を招いた。驚いて「不朽の自由作戦」と変更したが，もはや後の祭り，アフガン戦争はキリスト教侵攻に対するイスラムの聖戦という見方が広く深く浸透してしまった。アフガン戦争の泥沼化の根本的な原因の一つであろう。

繰り返すが，NDAや他の反キリスト教諸集団が，自爆攻撃を準備しているのは，本当かもしれない。もしそうなら，それにどう対処すべきなのか?

自爆攻撃が人権否定であり絶対に許せないことは言うまでもない。しかし，その一方で，人々を自爆攻撃にまで追い詰めたのは，一体何であったのかも，よく考えてみる必要がある。

キリスト教会は，ネパールの人々の気持ちを害するようなことはしていない――本当に，そういいきれるのか? イエスは「心の貧しくあること」を教えた。キリスト教会は，そのイエスの教えに忠実であったのか? 難しいことだが，ネパールの人々の側に立ってみて，いま一度，教会の布教のあり方を反省してみることも必要なのではないだろうか?

22:56 | 固定リンク | この記事を引用 | 宗教
2009/06/25

コミュナリズムの予兆(5)

谷川昌幸(C)

5

キリスト教改宗者の激増（2009年度キリスト教徒数150万人ともいわれている）や世俗国家への転換を背景に，5月23日（土），キリスト教会爆破事件が発生した。詳細は分からないが，概要は次の通り。

爆破されたのは，パタンの「カトリック被昇天教会(Assumption Church)」。この教会は，1951年にSt Xaviers Schoolを設立し運営してきたイエズス会の流れをくむネパール初のカトリック教会。1992年に教会として公認され，建物（パタン・ドービガート）は1996年に完成した。ネパール最大のカトリック教会。

爆破された被昇天教会　／　教会はパタンの高級住宅街にある（グーグル地図）

5月23日午前，被昇天教会ではミサが開かれ，約300人が出席していた。9時15分頃，圧力鍋爆弾が爆発，インド国籍の3人の女性（15歳，20歳，35歳）が死亡し，13人が負傷した。

警察発表では，実行犯は，シータ・タパ・シュレスタ（27歳）。彼女は「ヒンドゥー教国家護持委員会」メンバーで，ヒンドゥー教国家復帰を訴えていた。警察は彼女が爆破を自白したと発表している。

爆破については，「ネパール防衛軍(NDA)」が犯行声明を出した。NDAは，昨年，ビラトナガルでモスクや教会を爆破し，カトマンズでもあちこちを爆破している。昨年のダーランでのジョン・プラカシ師の殺害もNDAとされている。NDAビラには次のような脅しさえある。

「キリスト教徒100万人は国から出て行け。もし出ないなら，すべてのキリスト教徒の家に

100万発の爆弾を仕掛け，みな爆破してやる。」

以上は，あくまでも警察発表である。つじつまは合っているが，合いすぎていて，どこまでが事実か，疑念も残る。

しかし，シータが実行犯かどうかなど，まだわからない点も多いが，少なくともNDAのようなヒンドゥー教原理主義集団があらわれ，各地で活発に活動し始めたことは事実のようだ。
23:10 | 固定リンク | この記事を引用 | 宗教
2009/06/23

コミュナリズムの予兆(4)

谷川昌幸(C)

4

宗教が外から入ってくる場合，在来宗教と純粋に信仰のレベルで競争することはまずない。神々は，内面的な信仰の世界よりもむしろ，外面的な世俗世界で覇権を争う。

山本忠義（C.Perry）氏によれば，マッラ王朝時代，カプチン会修道士たちは，カトマンズ盆地で無料医療を提供し，ジャガジュ・ジャヤ・マッラ王も受診し，謝礼として住居を提供した。バクタプルやラリトプルでも同様であった。

「礼拝部屋が設けられ，医薬品が人々に近づく手段に用いられ，何千という重病の幼児や子供が洗礼を受けた。‥‥信仰者の多くはネワール人の土地なし農民で，神父たちは彼らに土地を買い与えた。」(p152)

ラナ家専制の時代には，ダージリンや印ネ国境付近で，ネパール布教活動が続けられた。

「インド北東のアッサムからネパール極西部のダルチュラに至るキリスト教の学校にはネパール人の生徒が見られた。‥‥／また，多くのハンセン病患者が治療を求めて国境を越え，チャンダグ高原やカリンポンのハンセン病ミッション病院を訪れた。‥‥／その他の医療宣教活動も多くのネパール人の生活に触れた。巡回クリニックや，国境に点在する病院や施薬所などである。巡回クリニックは定期的に国境地域を巡回し，医学と福音伝道を結びつけた。」(p158)

ボジラジ・バッタ牧師もこう述べている。

「(開国後)宣教団が社会開発援助団体としてネパールに入り始めた。その際，各団体はメンバーの地元民布教活動を厳禁するという文書をネパール政府に提出させられた。彼らは，医者，技術者，社会活動家としてのみ，入国できた。もし違反すれば，外国人は即時国外退去，ネパール人は厳罰に処せられた。もしヒンドゥー教徒や仏教徒に布教し改宗させたら，ネパール人は7年以下の投獄であった。」Bhojraj Bhatta, "Impact of Missionaries and Native Missions in the Present Reality of the Church in Nepal," May 2009 (http://nepalchurch.com/content/view/285/28/)

このように，キリスト教が途上国に入っていく場合，圧倒的に優位な富と科学的知識(近代知)が，どこでも神の行く道の露払いをしてきた。長崎でも，幕末維新に西洋からキリスト教諸派が殺到したが，その布教の武器もいうまでもなく富と科学的知識であった。

たとえば，僻地の外海地区に入ったドロ神父は，医療，教育，開拓，建築，地場産業育成など，まるで彼自身万能の神であるかのような働きをし，地域の人々の信望を一身に集めた。ドロ神父は，いまでも「ドロ様」として敬愛されている。

ドロ神父は立派なキリスト者であり，誠心誠意，無私の愛をもって貧困にあえぐ外海の人々を支援した。私ももちろん彼を深く尊敬している。

しかし，そのことと，ドロ神父が布教に富と科学的知識の力を利用したということは別の事柄である。キリスト教の神は，仏や在地の神々と純粋な宗教のレベルで競ったのではなかった。もしドロ神父に財産も科学的知識もなければ，彼がいかに神の愛を説こうが，村の人々は彼の言葉に耳を傾けなかったであろう。

これは，富や科学的知識で布教の露払いをしてはいけない，ということではない。現世利益は，どの宗教でも多かれ少なかれ説いている。神や仏を信じることで，金持ちになったり病気が治ったりしたとしても，それは何ら非難すべきことではない。人々は幸福になり，神仏のご威光も増す。

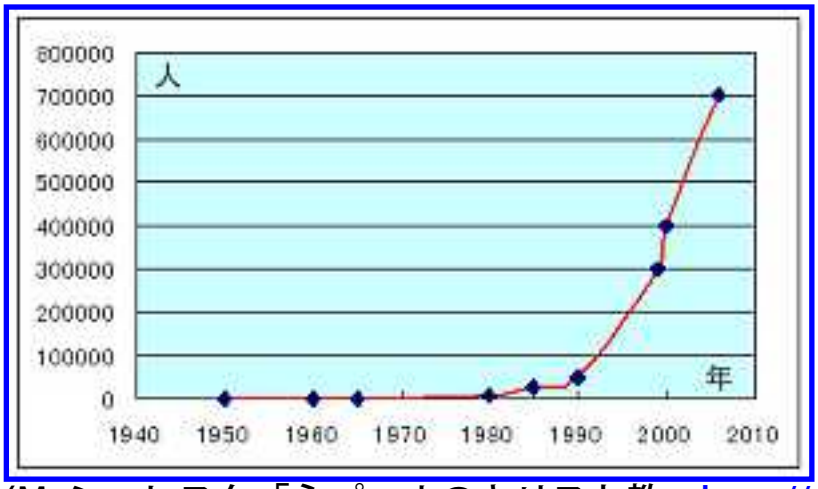
ただ，ここで注意すべきは，富や科学的知識において圧倒的に優位な側が，それらで布教の露払いをしているにもかかわらず，そのことに無自覚で，まるで自分の神と在来の神々とが，純粋に信仰のレベルで自由競争している，と錯覚してしまうことだ。

「自由」はいつの時代でも，強者の利益だ。貧者・弱者の神と富者・強者の神が「自由に」競争すれば，富者・強者の神が勝つ。イエスや仏陀ご自身は，まったく逆のことを教え，実践したが，歴史を見ると，残念ながら，彼らの教え通りにはならなかった。この歴史の逆説を，私たちは十分に自覚していなければならない。

富者や強者は，内面的な「宗教の自由」や「信教の自由」を唱えつつ，自分の神のために富や科学的知識といった外面的な世俗の力を使う。いや，富や科学どころか，しばしば軍隊をさえも使って，神の教えを宣べ伝えてきた。神や仏陀ご自身が，そんな外的な力を布教に使ってはいけないと，繰り返し繰り返し諌めているにもかかわらず，だ。

これは難しい問題だ。ウソも方便であり，現世利益が悪いわけではない。ただ，信仰においては魂の救済こそが究極の価値だという原点につねに立ち戻り，厳しく自己批判すべきだ，ということであろう。平凡ではあるが。

ネパールに話を戻すと，キリスト教会は，1990年革命により規制をゆるめられ，この数年の民主化運動IIをきっかけに急成長を始めた。マノーズ・シュレスタ氏によると，クリスチャンは2006年現在で70万人以上に達したという。



(M. シュレスタ「ネパールのキリスト教」http://www3.point.ne.jp/~doushin/NEPAL/CinNepal.html)

この数字は，世俗国家宣言後は爆発的に増え，いまでは150万人(2008-9年度）ともいわれている。この信者急増がどこまで現世利益によるものかは正確には分からないが，ただそれが既存のヒンドゥー教社会にとってはたいへんな脅威であることは当然であり，事実，あちことで軋轢が生じ始めている。

ここで難しいのは，先述のように，キリスト教会の側が富と科学的知識の点で圧倒的に優位な立場にあるということである。

このことは，たとえば先に引用したボジラジ・バッタ牧師自身がはっきりと認めている。彼の「希望教会(Hope Church)」がどのような教会か，まったく知識はないが，彼のこの文章は実に恐るべき内部告発だ。ネパールで活動する諸外国の教会団体や宣教師とそれらに寄生するネパールの諸教会・聖職者の，底なしの腐敗と堕落が容赦なく糾弾されている。文章の最後は，こう結ばれている。最悪と特に厳しく糾弾されている「東洋(あるいはアジア)の宣教師たち」が日本人でないことを祈るばかりだ。

「何という皮肉か!　宣教団や宣教師(内外いずれであれ）は真理・誠実・謙虚の使徒と考えられている。しかしネパールでは，彼らは(少数の無名のものを除き)欺瞞・腐敗・傲慢の輩とされてきた!　誰も，宣教師(特に東洋の)や外国宣教団所属ネパール人など信用しはしない。彼らがネパールの地域教会に対し何をしてきたか，誰でも知っているからだ。」

（参考）2008/12/29　ネパール養子，サンタにもらわれアメリカへ
23:50 | 固定リンク | この記事を引用 | 宗教
2009/06/22

コミュナリズムの予兆(3)

谷川昌幸(C)

3

ネパールへのキリスト教伝道は，かなり早い。山本忠義氏によれば，伝道略史は次の通り。

■キリスト教伝道略史
1579　イエズス会チベット・ミッションがネパールに入る。

1629　イエズス会南チベット・ミッションがネパールに入る。
1661　イエズス会神父２名。カトマンズのマッラ王と会見。
1703　チベット＝ネパール・ミッション設立。
1715　ネパール・ミッション設立。カプチン会修道士２名，カトマンズ滞在し布教。1722年，カトマンズを追放され，バクタプルへ移り1731年まで布教。
1732　フランシス・ホリス神父，カトマンズにはいるが，すぐ逮捕され投獄。釈放後布教するも，1734年国外退去。
1737　バクタプルとカトマンズのマッラ王，「良心の自由令」発布。カプチン会修道士，カトマンズに戻り布教。カトマンズとバクタプルで，10～30人の教会組織。
1744　ラリトプルのプラカシ・マッラ王，「良心の自由令」発布。
1769　ゴルカのプリトビ・ナラヤン・シャハ王がカトマンズ盆地攻撃。カトマンズのマッラ王はベンガルの英軍に支援を求める。神父・宣教師らは英国スパイと見なされ，投獄。キリスト教弾圧始まる。ヨセフ神父ら57人が亡命，北インドのBettiahに入植。以後，布教禁止。ネパール人への布教はダージリンや印ネ国境付近が中心となる。
1868　スコットランド教会のW・マクファーレン，ダージリンにはいる。
1870　W・マクファーレン，東部ヒマラヤ・ミッション設立，ネパール布教の中心となる。信者数＝130(1880), 2500(1900), 14000(1945)
1950年代　1951年，王政復古，開国。宣教師たちは，国王政府の改宗布教禁止を受け入れ，開発援助名目でネパール入国を始める。50年代にカトマンズ，ポカラ，ネパールガンジで教会設立。
　バクタプル教会（ＴＢ・デワン牧師）
　ジュッダ・サダク集会（プタリ・サダク教会，インド系）
　ディリバザール集会（ギャネスワール教会，Ｒ・カルタク）
　ブトワル：　1957年にショッバ書店設立
　タンセン，アンプ・ピパル：ネパール合同ミッション(UMN)，諸事業展開
　キリスト教雑誌『友情(sangati)』発行
1960年代　Nepal Christian fellowship設立(1960)
　ネパール福音伝道バンド設立（バグルン，ベニ，シッカ）
　教会建立（ギャネスワール，1969；プタリサダク，1962）
　ネパール合同ミッション(UMN)がオカルドゥンガ布教(1961)
　夏期語学研究所設立(1966)
　キリスト教青年会設立(1967)
　作戦動員団設立(1968)
　聖書教会委員会設立(1969)

■聖書のネパール語訳
1821　W・ケリー『ネパール語・新約聖書』サンスクリット版からのネパール語訳
1827　W・ケリー『パルパ語訳・新約聖書』
1852　英国国教会スタート師，「ルカ」と「使徒行伝」のネパール語訳。ニーベル師の改訳版(1861)
1875　マクファーレン師，聖書のネパール語部分訳
1876　スコットランド・ミッション孤児出版設立，のちゴルカ出版と改名。ダージリンから，聖書，キリスト教書，学校教科書等を配布。ネパール国内へ聖書行商。
1902　英国聖書協会，ネパール語・新約聖書出版
1914　英国聖書協会，ネパール語・新旧約聖書出版。旧約初版，4500部。
1960年代　ダージリンでネパール語キリスト教文書協会設立。キリスト教関係文書の印

刷，出版，ネパール国内への配布。
1977　英国聖書協会『改訂版・ネパール語新約聖書』出版。ネパール語キリスト教文書協会が本改訂版聖書や「詩篇」，新「賛美歌集」を印刷しネパールに配布。

＊山本忠義「ネパールのキリスト教伝道史（1600s～1960s）」2004 (http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christ/asia/act2003/act_asia20031219ty.pdf）。これは，Cindy Perry, "A Biographical History of the Church in Nepal," 1989 の翻訳・要約。

15:39 | 固定リンク | この記事を引用 | 宗教

2009/06/21

コミュナリズムの予兆(2)

谷川昌幸(C)

2

ネパールに外から入ってきた文化は，もちろんキリスト教だけではない。そもそもヒンドゥー教からして，インドに進出してきたイスラム教に圧迫されたヒンドゥー教徒たちがネパールに移住して広めたものであり，そのヒンドゥー教がいま他宗教のネパール布教をまかりならぬ，といっても説得力はない。

あるいは，見方によれば，すべてのイデオロギーは信仰ともいえる。「人権主義」教，「民主主義」教，「資本主義」教，「共産主義」教，「世俗主義」教等々。そして，それらの「宗教」ないしイデオロギーが，ネパールの既存のイデオロギーとフェアな自由競争をしてきたかというと，決してそうではない。「人権」にせよ「民主主義」にせよ，先進国の富と力により，無理矢理ネパールに押しつけられた。決して，対等者間の自由競争ではなかった。ヒンドゥー教と「世俗主義」教をみても，「世俗主義」教の背後には先進諸国の富と力があり，決して両宗教の自由競争にはなっていない。

したがって，キリスト教だけを取り上げ，ネパールで不公平な布教活動をしていると非難することはできない。キリスト教会がキリスト教を布教するのと，国連や先進諸国が人権主義や民主主義を布教し，アメリカや日本が資本主義を布教するのと，どこが違うのか。

同じだといってしまえば，キリスト教布教に金や力を使おうが，はたまた教育や医療で庶民を釣ろうがすべて自由だということになる。先進諸国や国連は，「人権」や「民主主義」や「資本主義」をネパールに布教するため，公然とそのような手段を使ってきたからである。

この議論を論理的にスッキリ論破するのは，難しい。しかし，常識的には，やはりどこか違うような気がする。「キリスト教」「仏教」と「人権」「民主主義」「資本主義」は，いずれも「信仰」にすぎないが，後者が実現に外的強制力の使用も許されると「信じられている」のに対し，前者は許されないと「信じられている」からである。

論理的にはいかにもあやふやで，いい加減だが，一応，建前としては，宗教は神や神代替物への信仰に関わるものであり，信仰は本質的に内面的なものだから，信仰への外的強制は許されない，と「信じられている」。もちろん，そう「信じない」宗教も多々あるが，少なくとも先進諸国や国際社会の常識では，そう「信じられている」。だから，健全な常識を持つ市民の一人として私も，信仰や布教には外的強制は許されない，という立場を建前としてとることにする。

16:31 | 固定リンク | この記事を引用 | 宗教

2009/06/20

コミュナリズムの予兆(1)

谷川昌幸(C)

1

今のネパールで心配なのは，政権の行方よりもむしろ，世俗国家移行に伴うコミュナリズム(宗教対立主義)の拡大だ。

最近の政治的混乱は，もちろん心配であり，昨日も述べたように，ネパールだけでなく世界にとっても混乱拡大は危険なことになりかねない。しかし，その一方，中央の政治的混乱にはネパールは慣れている。常態といってよい。これまでと同じく社会崩壊への一線さえ越えなければ，それは上部構造内の内輪もめにとどまるといってよい。

これに対し，コミュナリズムは，ネパール政治にとっては実体験のないものであり，いったん火がつくと，止められなくなる恐れがある。 ネパールの歴代為政者たちは，むろんこのことをよく知っていた。彼らは，その危険性を十二分に知り抜いていたからこそ，それをネパールに持ち込ませないよう細心の注意を払い，様々な予防措置を講じてきたのだ。

異文化，特にキリスト教にとって，こうした予防措置は，許し難いものであった。シャハ王朝が成立すると，キリスト教徒は弾圧・追放され，キリスト教は禁教とされた。この禁教は1951年の開国により解かれたが，依然としてヒンドゥー教は国教であり，抑圧が続いた。1990年民主化革命により，一応信教の自由はえられたものの，憲法には布教制限規定(第19条)が残っていたため，布教は実際には規制されていた。

こうした布教規制が，伝統的封建的社会秩序の温存に手を貸したことは紛れもない事実だが，他方では，それが途上国の多くに見られる豊穣な伝統的文化のキリスト教による圧殺や悲惨なコミュナリズム紛争を防止してきたこともまた事実である。この側面を見ず，一方的に布教の禁止や規制を非難することは，公平とはいえない。
22:15 | 固定リンク | この記事を引用 | 宗教
2009/06/19

ネパールの治安悪化とテロリズム

谷川昌幸(C)

ネパールの治安悪化が進行し，このままではテロリストの隠れ家となりかねない。

マオイストは，きちんとした綱領と組織を持つ「叛徒」であり，厳密にはテロリストではなかった。暴力革命だから，非合法であり，体制にとっては危険ではあっても，政治の論理に従っており，対応できない勢力ではなかった。

これに対し，本物のテロリストは，もし攻撃――特に自爆攻撃――を決意されたら，もはやどのような抑止力も利かない。核兵器で脅しても，一人のテロリストの攻撃ですら止められない。近代的・合理的抑止力論は，そこではまったく無力である。

かつてネパールには，日本赤軍の城崎勉氏が潜入した（正規メンバーではなかったともいわれている）。城崎氏は，1992年頃レバノンを出て，偽造旅券でネパールに潜入，僻地で鍼灸医，医療ボランティアをしていた。1996年９月19日，カトマンズで偽造旅券容疑で拘束され，22日FBIにより米軍機でワシントンへ連行，ジャカルタ事件（1986年）容疑で起訴され，禁固30年が確定，現在，連邦刑務所で服役中だ。

この有罪判決の正否はさておき，すでに1990年代前半において，インターポールから「テロリスト」容疑をかけられた城崎氏のような人にとって，ネパールは有力な潜伏先の一つであったのだ。

現在のネパールは，1990年代前半よりも，はるかに治安悪化している。地域社会が安定しておれば，潜入・潜伏は難しい。ところが，いまでは地域社会は衰弱・混乱し，警察も弱体化している。テロリストにとっては，格好の潜伏先といえる。

いま世界は，ますます住みにくく不安定な社会となっている。テロリズムの危機は，世界各地に広がり，日本も例外ではない。そうした状況であればこそ，ネパールの早期安定が日本と世界の安全のためにも強く求められるのである。
19:39 | 固定リンク | この記事を引用 | 平和
2009/06/18

皆さん，よい人なのに・・・・

谷川昌幸(C)

新聞などを見ると，連日，ギリジャ・コイララさん（NC党首，父），スジャータ・コイララさん（娘，外相），マダブクマール・ネパールさん（UML, 首相）らの悪口ばかりだ。罵詈雑言，よってたかって言いたい放題。もしこんなひどいことを女房や亭主にいったら，はり倒され，追い出されるに決まっている。

ギリジャさん／スジャータさん／ＭＫ・ネパールさん

ギリジャさんとは直接お話ししたことはないが，演説やセミナーでは何回かお目にかかった。立派な方だ。スジャータさんは，恐れ多くもご自宅でお茶しながら，歓談させていただいた。快活な魅力的な女性政治家だ。ネパールさんとも，何度かお話しする機会があった。共産党員でありながら謙虚で柔軟な方だ。お三方とも，尊敬すべき立派な方々なのだ。

特にギリジャさんは，つい２年前，首都で数十万，全国では数百万の「人民」が街頭に出て，悪の権化ギャネンドラ国王を権力から追放したとき，運動統合の象徴的な役割を果たされた。2006年人民運動Ⅱが無血名誉革命たりえたのは，革命諸勢力をその象徴的カリスマ性により一つにまとめられたギリジャ翁の働きがあったからだ。 だから，革命成功後，二千万余ネパール人民は歓喜し，感謝し，ギリジャ翁をノーベル平和賞に推薦したのだ（具体的手続きは不明）。

あぁ，それなのに。あれから，わずか２年にすぎない。「人民」は，あの感涙をケロッと忘れ，大恩ある長老政治家を足蹴にし，面罵している。健忘症「人民」には，敬老精神のかけらもない。 ギリジャ翁には及ばぬまでも，ＭＫ・ネパールさんやスジャータさんも，ネパール「人民」のため，大いに献身されてきた。それなのに，ネパールさんもスジャータさ

んも，連日，ボコボコに叩かれている。お気の毒に。

あのね，ギリジャ翁を「救国の父」と絶賛したのは，皆さんでしょ。ＭＫ・ネパールさんやスジャータさんを支えてきたのも，結局，皆さんでしょ。だって，1990年以来，People Powerなんだから。そんなにイヤなら，へっぴり腰でキャンキャンほえていないで，さっさと辞めさせたらよい。それだけのことでしょ。

意地汚く体制に依存しつつ，下品な悪口をまき散らすのは，父に養育されながら悪態をついている洟垂れ小僧のようなものだ。
13:38 | 固定リンク | この記事を引用 | ニュースと政治
2009/06/17

No name's space: MSN巨大化の陥穽

谷川昌幸(C)
RSSリーダーでこのブログをご覧の方は，数週間前から，表示が変なことにお気づきであろう。

No name's space

「名無しスペース」でアイコンもお化けのような人影。この現象は，数週間前，MSNがブログ・システムを改変してから，発生している。ブログ(スペース)そのものは，ちゃんとつくってあり，直接見ていただければ，次のようになる。

ネパール評論

だから，問題は，MSNのブログ(スペース)システムの障害なのだ。

最近は，RSSリーダーでご覧いただくことが多く，そこで「No name's space」と表示され，「お化けアイコン」が出るのでは，怪しいと疑われ，敬遠されるのは当然だ。ブログ著者にとっては，致命的だ。

そこで，MSNに障害の状況を詳しく伝え，早急な対応を依頼したが，何と「どこがおかしいのかよく分からない，しばらく待ってほしい」とのこと。 おい，おい，ブログのタイトルとアイコンなど，どんな弱小プロバイダー・ブログでも，個人作成ブログでも，ちゃ～んと，何の問題もなく表示されている。「名前」と「顔」は基本中の基本だ。それが，表示できないブログ・システムって，一体全体どうなっているのだ。

思うに，MSNスペースは，巨大化・複雑化しすぎて，どこかに障害が出ても，何が原因か分からなくなってしまっているようだ。こんな初歩的な障害が直せないなんて，信じられな

い。

ソフトでも制度でも巨大化しすぎると，総身に知恵が回りかね，自壊する。危ないので再度全データをバックアップした。ヤレヤレ。
10:06 | 固定リンク | この記事を引用 | コンピューターとインターネット
2009/06/16

書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(8)

谷川昌幸(C)

９．日本語の選び直しは可能か?
以上，速読・粗読気味であったが，水村美苗氏の『日本語が亡びるとき』を読んできた。もとより専門外の素人の読書ノートにすぎず，誤読もあろうが，そうした点は訂正しながら，お読みいただければ幸いである。

本書は，政治学一般の観点から読んでも面白いが，私の場合，最近，ネパール政治に凝っているので，とりわけ興味深く，身につまされる思いであった。

ネパールは，サンスクリットの豊穣な伝統に属し，植民地支配されることもなかったが，近代化が遅れたため，ネパール語の国語としての成熟以前に，英語帝国主義に席巻されてしまった。

ネパールでは，ネパール語が国語であり，1959年憲法以来，憲法でも「国語」と定められてきた。ところが，1990年民主化革命により自由化が一気に進むと，皮肉なことに，ネパール語を守ってきた様々な防壁が次々に取り除かれ，特にこの数年はインターネットを通して，英語が洪水のようにネパールに押し寄せてきた。

いまネパールに行くと，因襲的カースト制に代わって，新しい言語カースト制が成立しつつあることに気づく。「英語―ネパール語―諸民族語」の，魂までも序列化してしまう言語カースト制である。

ネパールでは，就職も昇進も，この言語カースト制により決まるようになってきた。それを見て，親たちは，どんな無理をしてでも，競って子供たちを内外の英語学校に入れようとする。高度な教育は，保育園・小学校から大学まで，英語で行われているからだ。貧乏人は，イヤイヤながら，現地語＝ネパール語学校に行く。ネパールでは，誰知らぬものはない公然たる事実だ。マオイストですら，この言語カースト制には拝跪している。悪循環だ。英語帝国主義への隷従だ。分かってはいるが，もはや誰にも止められない。

このネパールで，B・アンダーソンが唱えたことを，同じ鈍感さで，かつ大いなる善意をもって実践しているのが，国連諸機関だ。

在ネパール国連諸機関は，最新の包摂民主主義を奉じ，少数諸民族の言語の保護育成に躍起になっている。ところが，その際，彼らもまた英語で大キャンペーンを繰り広げているのだ。何たる偽善か!

英語帝国主義の国連諸機関やその手先のネパール人たちが，いくら母語教育を喧伝しようが，ネパールの人々は，言語カースト制の現実を日々イヤというほど見せつけられている。誰が，そんな偽善的母語教育の笛で踊るものか。

そもそも，ネパール最高の就職先たる国連諸機関に就職するには，高度な英語力を要求される。多言語主義・母語教育主義を唱えるなら，まず国連諸機関が英語帝国主義を率先して放棄し，多言語主義を実践せよ。そうすれば，ネパールでも母語教育が実現できるだろう。もしそれができないのなら，英語で多言語主義を唱えるなどといった恥知らずなことは，直ちに止めるべきだ。

ネパール語を国語として成熟させる前に英語を受容してしまったネパールでは，もはや国語としてのネパール語の選び直しは不可能であろう。パソコンの進化で，たしかにデバナガリの使用は容易になった。普通のキーボードから，誰でも簡単に /fi6«fiff (••••••• ••••) と入力できる。しかし， /fi6«fiff (••••••• ••••) と書いて，誰が読んでくれるのか。natinal languageであれば，世界中の人々に理解してもらえる。

これが国語の成熟を見る前に「英語の世紀」に引きずり込まれてしまったネパールの惨状だ。日本も，こんな悲惨な言語植民地になってしまって，それでよいのか?

日本語を選び直す――滔々と進行する「英語の世紀」の中で，それは本当な可能であろうか‥‥。

水村氏の『日本語が亡びるとき』は，まさしく「読まれるべき言葉」が書かれた本物の「憂国の書」である。

2009/06/15　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(6)
2009/06/13　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(5)
2009/06/12　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(4)
2009/06/11　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(3)
2009/06/10　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(2)
2009/06/09　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(1)

2009/05/17　英語植民地の「ミサイル発射」誤報調査報告
2009/04/05　北朝鮮「飛翔体」と防衛省カタカナ英語の危うさ
2009/03/23　学生紛争と留学宣伝
2008/08/02　ベルギー言語紛争から学ぶ
2008/07/28　言語戦争へ向かうか？
9:42 | 固定リンク | この記事を引用 | 本
2009/06/15

書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(7)

谷川昌幸(C)

７．英語の世紀と国語の危機

ところが，著者によると，グローバル化，情報化，大衆社会化などにより，いまや英語が唯一の普遍語となり，それ以外の国語は現地語へと引き下げられ，国民文学は存亡の危機に立たされている。「英語の世紀」が始まったのである。

たとえば，著者も指摘するように，日本でも学術論文は英語で書くようになりつつある。日本史や日本文学史の論文ですら，英語で書かされる。世界の多くの人に読んでもらうという高尚な目的よりも，業績評価において英語論文は５点もらえるのに，日本語論文はせいぜい２点，ひどい場合は０点にしかならないからである。

また著者は，日本の大学が翻訳機関たることを止め始めたと指摘しているが，これも加速度的に進行している。優秀な大学，大学院ほど，入試や授業の英語化を進めている。英語授業がウリなのだ。

かくして日本語・日本文学の祝祭の時代は終わりを告げつつある。次の文章には，著者の悲壮な憂国の情が溢れている。少し長いが，力強い文章なので，引用しよう。

　今、その〈国語の祝祭〉の時代は終わりを告げた。
　一度火を知った人類が火を知らなかった人類とちがうよう、あるいは、一度文字を知った人類が文字を知らなかった人類とちがうよう、一度〈国語〉というものの存在を知った人類は、〈国語〉を知らなかった人類とはちがう。美的のみならず、知的、倫理的な重荷を負うものとして〈自分たちの言葉〉で読み書きするのを知った人類は、地球規模の〈普遍語〉が現れたといっても、即、深い愛着をもつに至った〈国語〉に、知的、倫理的、美的な重荷を負わせなくなることはないであろう。だが、〈普遍語〉と〈普遍語〉にあらざる言葉が同時に社会に流通し、しかもその〈普遍語〉がこれから勢いをつけていくのが感じられるとき、〈叡智を求める人〉ほど〈普遍語〉に惹かれていってしまう。それは、春になれば花が咲き秋になれば実が稔るのにも似た、自然の動きに近い、ホモ・サピエンスとしての人間の宿命である。
　悪循環がほんとうにはじまるのは、〈叡智を求める人〉が、〈国語〉で書かかなくなるときではなく、〈国語〉を読まなくなるときからである。〈叡智を求める人〉ほど〈普遍語〉に惹かれてゆくとすれば、たとえ〈普遍語〉を書けない人でも、〈叡智を求める人〉ほど〈普遍語〉を読もうとするようになる。ふたたび強調するが、読むという行為と書くという行為は、本質的に、非対称なものであり、〈普遍語〉のような〈外の言葉〉を読むのは、書くのに比べてはるかに楽な行為である。すると、〈叡智を求める人〉は、自分が読んでほしい読者に読んでもらえないので、ますます〈国語〉で書こうとは思わなくなる。その結果、〈国語〉で書かれたものはさらにつまらなくなる。当然のこととして、〈叡智を求める人〉はいよいよ〈国語〉で書かれたものを読む気がしなくなる。かくして悪循環がはじまり、〈叡智を求める人〉にとって、英語以外の言葉は、〈読まれるべき言葉〉としての価値を徐々に失っていく。〈叡智を求める人〉は、〈自分たちの言葉〉には、知的、倫理的な重荷、さらには美的な重荷を負うことさえしだいしだいに求めなくなっていくのである。(p253-4)

まったくもって水村氏は愛国者(パトリオット)であり憂国の志士だ。漱石の苦悩を自らの苦悩として追体験したいと願っていられるようでさえある。しかし，その願いはもはや叶えられそうにない。

果たして漱石ほどの人物が、今、大学を飛び出して、わざわざ日本語で小説なんぞを書こう

とするであろうか。今、日本語で小説を書いている人たちの仲間に入りたいと思うであろうか。いや、それ以前に、問わねぽならない問いがある。果たして漱石ほどの人物が、もしいたら今、日本語で書かれている小説を読もうなどと思うであろうか。／悲しいことに悪循環はとうにはじまり、日本で流通している〈文学〉は、すでに〈現地語〉文学の兆しを呈しているのではないだろうか。(p261)

＊参照：内田樹「日本の外国文学が亡びるとき」（http://blog.tatsuru.com/2008/12/17_1610.php）

８．「英語の世紀」の英語教育と日本語教育
(1)英語帝国主義の鈍感と偽善
憂国の志士，水村氏は「英語の世紀」の到来に悲壮な闘いを挑まれている。「英語帝国主義」などといった俗な表現は使用されていないが，内容的には氏の主張は英語帝国主義批判に他ならない。本書で，この関係で私にとって特に印象的であったのは，氏のB・アンダーソン批判である。

著者は，アンダーソンが著書『想像の共同体』において国家を「想像の共同体」とし，それと「国語」との関係を解明したことを高く評価しつつも，「英語に関する考察がまったく欠落している」という点を厳しく批判する。 著者によれば，アンダーソンは2005年，早稲田大学で講演し，最後をこう締めくくったそうだ。

学ぶべき価値のある言葉は、日本語と英語だけだと考えているような人は間違っています。そのほかにも、重要で美しい言語がたくさんあります。本当の意味での国際理解は、この種の異言語間のコミュニケーションによってもたらされます。／英語ではだめなのです。保証しますよ。(p116)

これに対し著者は，そんなことをいっても，それじゃと，インドネシア語やフィリピン語を学ぶ人がどれだけいるか，と批判する。アンダーソンは，多言語主義が実際には英語ができることを大前提にしていることに，まったく気づいていない。

アンダーソンには英語が<普遍語>であることの意味を十分に考える必然性がなかっただけではない。考えないまま、多言語主義の旗手となる必然性ももっていたのである。(p119)

この部分の注で，著者はアンダーソンもあとで普遍語としての英語の力に気づくようになったと補足しているが，しかし，英語圏の人々が英語の特権的地位に鈍感なことは，紛れもない事実だ。

弱小言語の大切さを最強普遍語の英語で述べ伝える。「英語ではだめなのです」と英語で言う。何たる鈍感，何たる偽善か!　これぞ英語帝国主義の真骨頂だ。著者はこんな下品な表現はされていないが，ここでの批判は，まさにこのようなことであろう。

こうしたことは，グーグルの図書デジタル化計画についても認められる，と著者は指摘している。たしかに，各国語の図書のデジタル図書館化は可能であろうが，英語はそれらとはまったくレベルが異なる。そのことに英語圏の人々はまったく無自覚だ。

それらの［非英語］〈図書館〉のほとんどは、その言葉を〈自分たちの言葉〉とする人が出

入りするだけなのである。／唯一の例外が、今、人類の歴史がはじまって以来の大きな〈普遍語〉となりつつある英語の〈図書館〉であり、その〈図書館〉だけが、英語をく外の言葉>とするもの凄い数の人が出入りする、まったくレベルを異にする〈図書館〉なのである。／英語を〈母語〉とする書き手の底なしの無邪気さと鈍感さ。(p246)

まさにその通り。こうした英語母語者の無邪気と鈍感こそが，「英語の世紀」の最大の脅威であり，憂国の志士，水村氏と共に「日本語宣言」を高く掲げ，断固闘い抜かねばならないのである。

(2)英語エリート教育のすすめ
「英語の世紀」はもはや押しとどめられない。では，この時代において，どのような英語教育を行い，どのようにして日本語を守っていくか?　これが水村氏のこれからの切実な課題となる。

「英語の世紀」の英語教育には，次の三つの方針が考えられる。
　Ⅰ　<国語>を英語にしてしまう。
　Ⅱ　全国民をバイリンガルにする。
　Ⅲ　国民の一部をバイリンガルにする。

①英語エリート教育
結論から言うと，著者はⅢの英語エリート教育を採用するよう要求する。

Ⅲを選ばなくては、いつか、日本語は「亡びる」。(p278)

日本が必要としているのは、専門家相手の英語の読み書きでこと足りる、学者でさえもない。日本が必要としているのは、世界に向かって、一人の日本人として、英語で意味のある発言ができる人材である。‥‥／かれらは、英語を苦もなく読めるのは当然として、苦もなく話せなくてはならない。発音などは悪くともいいが――悪い発音で流通するのが〈普遍語〉の〈話し言葉〉の特徴である――交渉の場で堂々と意見を英語で述べ、意地悪な質問には諧謔を交えて切り返したりもしなくてはならない。それだけではない。読んで快楽を与えられるまでの、優れた英語を書ける人もいなくてはならない。優れた英語を書くことこそ、インターネットでプログが飛び交い、政治そのものが世界の無数の人たちの〈書き言葉〉で動かされるこれからの時代には、もっとも重要なことだからである。(p276-7)

この英語エリート教育に，私は賛成だ。国際交渉の場で堂々と意見が述べられないのは英語だけのせいとは思わないが，それでも英語圏の人々と同等以上に英語に通じた練達の英語プロ集団をもつことは，「英語の世紀」における日本国益のためにも，絶対に必要なことだ。戦車や戦艦などなくても，英語プロ軍団は不可欠だ。

②片言英語教育の愚劣
では，日本は実際にはどのような英語教育を行っているのか?　Ⅰの英語を日本国語とする案は，かつて森有礼が唱えたことがあるが，いまではこれの支持者はほとんどいない。

いま目標とされているのは，Ⅱである。学校教育を通して，「国民総バイリンガル社会」を実現し，英語を(第二)公用語にしてしまおうというのだ。

しかし，著者は，そんなことは不可能だし必要でもないと批判する。この先，在日外国人が少々増えようと，日常会話は片言で用が足り，皆がバイリンガルになる必要はさらさらない。

ところが，日本の学校教育は，英語ができなければ乗り遅れるといった世間の英語強迫観念にも押され，不必要かつ不可能な「国民総バイリンガル社会」を目標としている。

小学校では，「片言でも通じる喜びを教える」ため，英語が導入された。見当外れも甚だしい(p287)。 インターネットの時代，もっとも必要になるのは，「片言でも通じる喜び」なんぞではない。それは，世界中で通用する<普遍語>を読む能力である(p289)。

③英語は選択科目に
「英語の世紀」に求められる英語プロ集団を育成するには，学校での英語は選択科目とすべきなのである。

(3)日本語教育
著者は，「英語の時代」の英語教育をこのように英語エリート教育に改めることにより，国語を守っていくことが可能になると考える。

もし、私たち日本人が日本語が「亡びる」運命を避けたいとすれば、IIIという方針を選び、学校教育を通じて多くの人が英語をできるようになればなるほどいいという前提を完璧に否定し切らなくてはならない。そして、その代わりに、学校教育を通じて日本人は何よりもまず日本語ができるようになるべきであるという当然の前提を打ち立てねばならない。(p284-5)

　だからこそ、日本の学校教育のなかの必修科目としての英語は、「ここまで」という線をはっきり打ち立てる。それは、より根源的には、すべての日本人がバイリソガルになる必要などさらさらないという前提すなわち、先ほども言ったように、日本人は何よりもまず日本語ができるようになるべきであるという前提を、はっきりと打ち立てるということである。学校教育という場においてそうすることによってのみしか、英語の世紀に入った今、「もっと英語を、もっと英語を」という大合唱に抗うことはできない。しかも、そうすることによってのみしか、〈国語〉としての日本語を護ることを私たち日本人のもっとも大いなる教育理念として掲げることはできない。
　人間をある人間たらしめるのは、国家でもなく、血でもなく、その人間が使う言葉である。日本人を日本人たらしめるのは、日本の国家でもなく、日本人の血でもなく、日本語なのである。それも、長い〈書き言葉〉の伝統をもった日本語なのである。
　〈国語>こそ可能な限り格差をなくすべきなのである。 (p290)

2009/06/13　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(5)
2009/06/12　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(4)
2009/06/11　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(3)
2009/06/10　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(2)
2009/06/09　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(1)
14:17 | 固定リンク | この記事を引用 | 本
2009/06/14

書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(6)

谷川昌幸(C)

５．国語と国語の祝祭
(1)国語 National Language
著者は，国語を「国民国家の国民が自分たちの言葉だと思っている言葉」(p105)と定義する。そして，国家が自然なものではなく「想像の共同体」（B・アンダーソン)であるのと同じく，「 <国語>は自然なものではない」(p105)と考える。

国語は，国民国家が成立し，その社会の出版語(print language)が国民国家の言葉に転じたとき，生まれる。つまり，15世紀に印刷機が発明され，「口語俗語」が「書き言葉」となり，書物として印刷され，これが資本主義の発達により成立した市場において広く流通することにより，国民国家の言語としての国語が成立するのである(p109-113)。

この国語の成立において不可欠なのが，上位レベルの言語(ラテン語など)を下位の現地語に訳す「翻訳」である。

翻訳とは、そうすることによって、上位のレベルにある〈普遍語〉に蓄積された叡智、さらには上位のレベルにある〈普遍語〉によってのみ可能になった思考のしかたを、下位のレベルにある〈現地語〉の〈書き言葉〉へと移す行為だったのである。／その翻訳という行為を通じて、〈現地語〉の言葉が〈書き言葉〉として変身を遂げていく。ついには、〈普遍語〉に翻訳し返すことまで可能なレベルの〈書き言葉〉へとなっていく。〈国民国家〉の誕生という歴史を経て、その〈書き言葉〉がほかならぬ〈国語〉として誕生するのである。(p134)

こうして国語が誕生しても，ヨーロッパ知識人は，長らく普遍語(ラテン語など)と国語の二重言語者であったが，仏英独語などの各国語が十分成長すると，それらが普遍語へと昇格し，人々はラテン語などでの読み書きをやめ，それぞれの国語で学問をするようになった。仏英独語は普遍語と国語の二重性をもつ言語となったのである(p138-140)。そして，その後，仏独語が脱落し，英語が世界の普遍語の地位を獲得していくことになる。 ここで普遍語と学問の関係が問題となる。

くり返すが、学問とは、なるべく多くの人に向かって、自分が書いた言葉が果たして〈読まれるべき言葉〉であるかどうかを問い、そうすることによって、人類の叡智を蓄積していくものである。学問とは〈読まれるべき言葉〉の連鎖にほかならず、その本質において〈普遍語〉でなされる必然がある。／このことは、何を意味するのか？／それは、〈自分たちの言葉〉で学問ができるという思いこみは、実は、長い人類の歴史を振り返れば、花火のようにはかない思いこみでしかなかったという事実である。〈国語〉で学問をしてあたりまえだったのは、地球のほんの限られた地域で、ほんのわずかなあいだのことでしかなかった。そして、その時代は、長い人類の歴史のなかでは、規範的であるよりも、例外的な時代であった。(p144)

学問は，西洋語(仏英独)でなされなければならなくなり，そしていまや英語でなされなければならなくなったのである。こう考えると，前述のように，日本ではこれまで日本語で学問ができていたということが，いかに奇跡的なことかが，よく分かる。

(2)国語の祝祭
しかし，国語はもう一つ，それが現地語・母語にも足をおいているという特質がある。普遍語と現地語の両特性の上に成立するのが，国民文学であり，著者はそれが栄えた時代を「国語の祝祭」の時代と呼んでいる。

ヨーロッパで<国民文学>としての小説が、満天に輝く星のようにきらきらと輝いたのは、まさに<国語の祝祭>の時代だったのであった。それは、<学問の言葉>と<文学の言葉>とが、ともに、〈国語〉でなされていた時代である。そして、それは、〈叡智を求める人〉が真剣に〈国語〉を読み書きしていた時代であり、さらには、〈文学の言葉〉が〈学問の言葉〉を超えるものだと思われていた時代であった。(p147-8)

くり返すが、〈国語〉とは、もとは〈現地語〉でしかなかった言葉が、〈普遍語〉からの翻訳を通じて、〈普遍語〉と同じレベルで、美的にだけでなく、知的にも、倫理的にも、最高のものを目指す重荷を負うようになった言葉である。しかしながら、〈国語〉はそれ以上の言葉でもある。なぜなら、〈国語〉は、〈普遍語〉と同じように機能しながらも、〈普遍語>とちがって、〈現地語〉のもつ長所、すなわち〈母語〉のもつ長所を、徹頭徹尾、生かし切ることができる言葉だからである。(148-9)

かくして、〈国語〉は、あたかも自分の内なる魂から自然にほとばしり出る言葉のように思えてくるのである。〈国語〉とは、必然的に、〈自己表出〉の言葉となる。小説は、社会に対する個人の内面の優位を謳うものとして発展していったが、内面の優位とは、実は、〈国語〉で書くことの結果でしかない。(p149)

６．国語としての日本語の成立と日本文学
(1)国語としての日本語の成立
著者は，このような仏英独語に匹敵する国語が日本において奇跡的に成立したのは，幸運にも次の三条件が満たされたからであったと考える。

①「書き言葉」としての日本語の成熟
日本語は，普遍語としての漢文の日本現地語への翻訳を通して熟成していき，普遍語と同等のレベルの言語となっていった。その際，日本と漢文圏との「距離」も幸いした。近すぎると，たとえば科挙制度などで，日本が漢文圏に吸い込まれてしまうことを防止できなかったであろう。こうして――

日本の二重言語者の男たちは<普遍語>で読み書きしながらも、自然に<現地語>でも読み書きするようになった。／そのおかげで、日本語は<普遍語>の高みに近づき、美的な重荷を負うだけでなく、時には、<普遍語>と同じように、知的、倫理的な重荷も負うのが可能な言葉になっていったのであった。(p169)

②印刷資本主義
江戸時代には，300年の平和の下で資本主義が発達し，藩校や寺子屋により教育も普及した。識字率は世界一だったといわれている。

これを背景に，印刷資本主義が発達し，日本の「書き言葉」は成熟し広く流通していった。著者も指摘するように，福沢諭吉の『学問のすゝめ』は初版(明治5年)が20万部，全17編で

300万部以上売れたのである。

③植民地支配を受けなかった
日本語成立にとって，日本が植民地にならなかったことは，決定的であった。植民地支配されれば，宗主国言語が支配言語となり，現地語は下位言語とされてしまう。もしアメリカが日本を植民地化しておれば(可能性は大であった)，日本中の優れた人々は英語で教育を受け，英語で読み書きするようになっていただろう。

要するに、もしアメリカの植民地になっていたら、〈普遍語/現地語〉という、二重構造のなかで、英語が〈普遍語〉として流通し、日本語は、正真正銘の〈現地語〉として流通することになったはずである。たとえ美的な重荷を負うことはあっても、知的、倫理的な重荷を負うことはほとんどなかったはずである。悲しい「ニホンゴ」。(p180)

幕末維新の頃の愛国主義，ナショナリズムは，植民地化を免れ独立維持を目指す限りにおいて，決して不健全なものではなかった。その最大の文化的遺産は，著者が称賛するように，日本語であったといってよいであろう。

(2)大学と日本語
日本語が成熟するには，大学の果たした役割も大きかった。そもそも日本の大学は西洋文明の翻訳機関として設立され，「翻訳者養成所として機能するようになった」(p199)。

［日本の大学は英独仏三大言語を教えた。］そして、重要なのは――世界的にみても重要なのは、このような非西洋の二重言語者である日本人が、西洋語という〈普遍語〉をよく読みながらも、〈普遍語〉では書かず、日本語という〈国語〉で書いたという点にある。それによって、かれらは翻訳を通じて新しい〈自分たちの言葉〉としての日本語を生んでいった。そして、その新しい日本語こそが〈国語>――同時代の世界の人々と同じ認識を共有して読み書きする、〈世界性〉をもった〈国語〉へとなっていったのであった。(p200)

日本に近代文学があるのを可能にした条件は日本に〈国語〉があったことにあり、日本に〈国語〉があるのを可能にした条件は日本に大学があったことにあり、日本に大学があるのを可能にした条件は、まさに日本が西洋列強の植民地になる運命を免れたことにあった。(p201)

事実、〈国語〉が高みに達したときは、単一言語者であっても、〈世界性〉をもった文学を書けるようになる。しかも、時を得た人間の能力には底知れぬものがあり、すべては目を瞠るような勢いでおこる。二重言語者が育つやいなや一挙に翻訳本が増える。すると〈世界性〉をもった〈国語〉で書かれた言葉が一挙に増える。〈世界〉で何が起こっているかをおおよそ知るために、西洋語をじかに読む必要がなくなるのである。／そして、言葉というものは、そうなってこそ、〈国語〉だと言えるのである。(p229)

こうして，日本語は漢文からの翻訳，西洋語からの翻訳を通して「国語」の高みに達し，そして著者のいうあの奇跡としての日本近代文学を生み出していくことになったのである。

2009/06/13　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(5)
2009/06/12　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(4)
2009/06/11　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(3)

2009/06/10　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(2)
2009/06/09　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(1)
9:59 | 固定リンク | この記事を引用 | 本
2009/06/13

書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(5)

谷川昌幸(C)

４．普遍語・国語・現地語
本書における議論のキータームは，言語の三類型としての「普遍語」「国語」「現地語」である。また，これらを使う人々については，自分の話し言葉以外の言語を読める人を「二重言語者」，二言語を自在に話せる人を「バイリンガル」と呼び，明確に区別される。

(1)言語の三類型
まず，言語の三類型については，それら３種の言語は上下の三層構造をなすものとして説明される。学問的真理を基準とするなら，普遍語が最上位にあり，現地語が最下位に来る。ところが，生活の「現実」を基準とすれば，現地語がそれに最も近く，普遍語は遠いということになる。図解すれば：

普遍語　―　国語　―　現地語

この言語三類型の説明を見たとき，私はすぐ丸山眞男の「思想史の考え方について」（1961年，著作集９）を思い浮かべた。丸山は，思想を次の三類型に分類した。

教義　―　観念　―　時代精神

教義は，高度に自覚的で抽象度の高い体系や学説。観念は，「進歩」や「いき」など，教義ほども自覚的でも体系的でもないもの。時代精神は，理性的反省以前の生活感情さらには意識下にあるもの。丸山は，これら３レベルの思想の関係について，次のように説明している。

このさまざまのレヴェルでの思想の相互の連関を考えるについては、まずこれを全部包括した、多義的なものとしての「思想」を出発点として想定します。そうしますと、およそ思想というものにオリエンテーションを与える、つまり目標や方向性を与えるのは、相対的にこの成層において上のレヴェルにあるものです。つまり目的意識性、目的設定による方向性というものは、上から下に向かって行く。それに反して思想を推進していくようなエネルギーというものは、逆にこの層の下の方から発して上へと上昇していくこういうことが言えるのではないでしょうか。そこでカントの有名な言葉をもじっていうならば、たとえば生活感情とか実感とか、そういうものによって裏づけられないところの理論なり学説なり教義なりは「空虚」であり、逆に理論、学説、教義あるいは世界観というものによって方向づけられない実感は「盲目」である、つまりエネルギーはあるけれどもどこにいくか、どういう機能を果たすかわからない。こういうことがいえるのではないか。一般的に目的設定もしくは方向性の設定は上から下に、エネルギーは下から上にいく、ということになりましょう。（著作集，p65-66）

さすが丸山，あざやかな分析である。学問（科学）と実感のいずれかなどという，不毛な議論ではなく，両者はいわば弁証法的関係にある。 水村氏の言語の三類型は，結局，丸山が言おうとしたことと，おなじことであろう。彼女は，ここではおそらく丸山のこの論文は見ていない。もし彼女がこの論文を読み，下敷きにしていたら，この部分の議論はもっと明確なインパクトがあるものになっていたであろう。

(2)二重言語者とバイリンガル
次に，「二重言語者」と「バイリンガル」については，著者は，話すことよりも読むことを重視し，もっぱら「二重言語者」について議論している。「普遍言語」を母語としない人々にとって重要なのは，「普遍言語」をペラペラ話せるようになることではなく，それを読めるようになることだからである。（後述のように，この観点から軽薄英会話教育が完膚無きまでに批判されることになる。）

――以上のことをふまえて，以下，「普遍語」と「現地語」についてみていく。「国語」はそれら両者との関係の中で議論されるので，節を改め議論することにする。

(3)普遍語（universal language）
普遍語とは，原理的に世界に開かれた世界言語であり，たとえばラテン語，ギリシャ語，アラビア語，サンスクリット，漢語などである。

①聖なる言語：　もともと普遍語はキリスト教，イスラム教，ヒンドゥー教，仏教，儒教などの聖典を書き記した「聖なる言語」（B・アンダーソン）であった。

②書き言葉，読まれるべき言葉：　この「聖なる言葉」は「書き言葉」であり，「読まれるべき言葉」であった。つまり，それらは様々な現地語を使う人々が共通して読み書きする普遍言語であり，二重言語者の使う言語だったのである。

③世界に開かれた言葉：　普遍言語は，現地語や母語がなんであれ，共通して読まれるべき言語であり，したがって「世界に向かって開かれた言葉」である。その純粋型は，誰の母語（現地語）でもない数学言語。これは万人に開かれている。

④学問の言葉：　普遍語は，書き言葉であり，記録として残り，したがって写され，修正され，追加され，広まっていく。それは，人類の叡智の蓄積である。だから，「叡智を求める人」は，普遍語を読み普遍語で書こうとする。普遍語は「学問＝scienceの言葉」である。

学問で〈普遍語〉を使うのは、便宜上のためや、慣習や法に従うためではない。学問とは、なるべく多くの人に向かって、自分が書いたことが〈真理〉であるかどうか、〈読まれるべき言葉〉であるかどうかを問うことによって、人類の叡智を蓄積するものだからである。くり返すが、学問とは〈読まれるべき言葉〉の連鎖にほかならず、その本質において、〈普遍語〉でなされてあたりまえなのである。（p129)

(4)現地語(local language）
現地語とは，多くの場合，母語であり，人々が巷で使う「口語俗語」である。

〈普遍語〉は、上位のレベルにあり、美的にだけでなく、知的にも、倫理的にも、最高のものを目指す重荷を負わされる。それに対して、〈現地語〉は下位のレベルにあり、もし〈書

き言葉〉があったとしても、それは、基本的には、「女子供」と無教養な男のためのものでしかない。(p132)

しかし，その反面，母語は自然に体得するものであって，言語の恣意性を意識しなくても済む。母語は生まれながらに話していたように感じられる。「お母さん」という言葉とそれが指し示す対象としての「母親」との間には，自然な必然的関係があるように思われる。それが現地語の特権である。

これは，いわば生活実感としての言語といってもよいであろうが，この部分の著者の説明は必ずしも十分とはいえない。現地語は「女子供と無教養な男のためのもの」(p132）などと偽悪的な表現をしているが，説明不足のため真に受けて，水村氏は現地語蔑視だ，女性差別だ，インテリ・エリート主義だ，などと憤慨する人が出てくるにちがいない。

むろん著者は現地語蔑視などしてはいない。おそらく著者は，人為的な(意識的に学習する)普遍語と，自然な(と感じられる)母語ないし現地語を対比し，前者はその人為性のゆえに翻訳可能だが，後者はその自然性・直接性のゆえに翻訳不可能だ，ということがいいたいのだろう。経験の直接性や固有性，あるいは生活「実感」は，自然な(と感じられている)母語ないし現地語でしか語れない。それが現地語の特権だということであろう。

著者の説明は，ここのところがいまひとつ明確ではない。普遍語と現地語をヒエラルヒーの上下に位置づけてしまったがため，現地語の固有の意義がはっきりしなくなってしまったのだ。現地語や母語には，普遍語に翻訳しきれない特権的価値があり，そこから「文学の真理」は生まれてくる。おそらくそういうことだろうが，そこのところが明確ではない。

ここのところは，もし著者が丸山眞男を読んでいたのであれば，あの「教義―観念―時代精神」の図式が利用できたはずだ。そうすれば，「普遍語―国語―現地語」の説明が，もっとダイナミックに，わかりやすく説明できていたであろう。

(5)「学問の真理」と「文学の真理」
この普遍語と現地語(母語)の問題は，「学問の真理」と「文学の真理」の区別，あるいは「テキストブック」と「テキスト」の区別という観点からも，議論されている。これも，分かったようで，よく分からない。著者はこう説明している。

<テキストブック>を読めばすむ<真理>を代表するのが<学問の真理>なら、<テキスト>そのものを読まねばならない<真理>を代表するのが，<文学の真理>である。(p152)

くり返すが、この世には二つの種類の〈真理〉がある。別の言葉に置き換えられる〈真理〉と、別の言葉には置き換えられない〈真理〉である。別の言葉に置き換えられる〈真理〉は、教科書に置き換えられるく真理>であり、そのような〈真理〉は〈テキストブック〉でこと足りる。ところが、もう一つの〈真理〉は、別の言葉に置き換えることができない。それは、〈真理〉がその〈真理〉を記す言葉そのものに依存しているからである。その〈真理〉に到達するには、いつも、そこへと戻って読み返さねばならない〈テキスト〉がある。（p251)

真理には「学問の真理」と「文学の真理」があることは分かる。文学は数式には還元できない。そして「学問の真理」はテキストブックに書き留められ，それを読めば分かることも分

かる。数学の真理は数式を読めば理解力のある人には理解できるからである。

では，数式にも還元できず，別の言葉にも翻訳できない「文学の真理」とは何か?　著者は，文学的真理は「言葉そのものに依存している」といい，またそれは「文体に宿る」(p153)ともいっている。では，ここでいう「言葉」や「文体」とは何であり，それらで表現される「真理」を「知る」とはどのようなことか?

「テキスト」を「テキストブック」に翻訳していって，それでも最後まで翻訳しきれずに残る文学的真理とは何か?　難しいが，いつかは翻訳しきれるはずの「真理」なのか?　それとも本質的に学問的には理解不可能な別個の「真理」なのか?

もし別個の「真理」とすると，それがどうして複数者に共有されることを本質とする「言葉」によって表現できるのか?　翻訳不能な自分だけの「言葉」は，形容矛盾ではないのか?　いや，それよりもなによりも，いかに根源的・個人的な体験(本人のみの特権的「実感」と感じられるもの)にせよ，実際には，他者なしでは成立しないのではないか?

あるいは，「テキスト」や「文体」そのものに宿る「真理」とは，分からないけれど何かあるに違いないといった「真理」なのか?　あるいは，分からないけれど「テキスト」や「文体」に何かあると，どうして分かるのか?　そんなものはないのではないか?

この問題の理解を一歩前進させるためには，実感(主観)と科学(客観)を媒介する美的判断，つまり特権的個別的実感（直接的体験）が他者にどう共感(共有)されるか，の考察が必要ではないか?　文学的真理は，著者が言うように「言葉」に依存するものであり，であるとすると，もっぱら科学と対比してその特権的個別性を擁護するのではなく，むしろ美的判断の対象として取り扱った方がよいのではないか?

以上のように，この問題は，切った張ったの俗な政治学をやっている私にとってはあまりにも難しい。分かるようで分からない。分からないようで分かる。そこが、文学の文学たるゆえんかもしれない。

2009/06/12　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(4)
2009/06/11　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(3)
2009/06/10　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(2)
2009/06/09　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(1)

11:36 | 固定リンク | この記事を引用 | 本
2009/06/12

書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(4)

谷川昌幸(C)

３．奇跡としての日本語と日本文学
(1)日本語・日本文学の世界的意義
パトリオットにしてナショナリスト，憂国の志士・水村氏は，日本語をフランス語に優るとも劣らない世界史的意義を持つ言語と確信している。そして，その日本語で書かれた日本文

学も，世界史的価値を持つ。これはブリタニカも認めているところだとして，著者はその部分を翻訳し引用している。

その質と量において、日本文学は世界のもっとも主要な文学(major literatures)の一つである。その発展のしかたこそ大いにちがったが、歴史の長さ、豊かさ、量の多さにおいては、英文学に匹敵する。現存する作品は、七世紀から現在までに至る文学の伝統によって成り立ち、この間、文学作品が書かれなかった「暗黒の時代」は一度もない……。(p102，下線部分は原著傍点)

(2)奇跡としての日本語・日本文学
これは，非西洋世界にあっては奇跡的なことだ，と著者は力説する。

日本のようにはやばやとあれだけの規模の近代文学をもっていた国は、非西洋のなかでは、見あたらないということである。そして、さらに、たしかなのは――たしかである以上に重要なのは、たとえ世界の人には知られていなかったとしても、世界の文学をたくさん読んできた私たち日本人が、日本近代文学には、世界の傑作に劣らぬ傑作がいくつもあるのを知っているということである。／そのような日本近代文学が存在しえたこと自体、奇跡だと言える。(p103)

日本が近代以前から成熟した文学的な伝統をもっていたおかげ――まさに、漢文も含めた長い文学の伝統、しかも、市場を通じて人々のあいだに広く行き渡っていた文学の伝統をもっていたおかげである。日本の文学は、「西洋の衝撃」によって、〈現実〉の見方、そして、言葉そのもののとらえかたに「曲折」を強いられた。世界観、言語観のパラダイム・シフトを強いられた。だが、日本の文学はその「曲折」という悲劇をバネに、今までの日本の〈書き言葉〉に意識的に向かい合い、一千年以上まえまで遡って、宝さがしのようにそこにある言葉を一つ一つ拾い出しては、日本語という言葉がもつあらゆる可能性をさぐっていった。そして、新しい文学として生まれ変わりながらも、古層が幾重にも重なり響き合う実に豊かな文学として花ひらいていったのである。／‥‥これほど多様な文字と文学の伝統とをまぜこぜにし、しかもそれぞれの歴史の跡をくっきりと残した文学――そのような文学は私が知っている西洋の文学には見あたらない。(p225-226)

日本人が日本語という言葉に向かい合ううちに、日本近代文学は波のうねりが高まるように、四方の気運を集め、空を大きく駆けめぐったのである。そして、それは、歴史のいくつもの条件が重なり、危うい道を通り抜けて初めて可能になったことであった。日本近代文学というものがこの世に存在するようになったこと――れ自体が、日本近代文学の奇跡なのである。(p227)

(3)日本語・日本文学の固有性
しかも、著者によれば，日本語・日本文学は単に優れているばかりか，他をもってしては代え難い固有の存在価値を持っている。

日本文学の善し悪しがほんとうにわかるのは、日本語の〈読まれるべき言葉〉を読んできた人間だけに許された特権である。／強調するが、いくらグローバルな〈文化商品〉が存在しようと、真にグローバルな文学など存在しえない。グローバルな〈文化商品〉とは、ほんとうの意味で言葉を必要としないもの――ほんとうの意味で翻訳を必要としないものでしかありえない。(p264)

かなりキワドイ発言だ。日本文化は日本人にしか分からないという，すでに論破されたと信じられている議論スレスレだ。たしかに挑発的発言であり危ういが，しかし，今はやりの多文化主義は，結局，このことをいっているのではないか。

著者と違って，議論を詰めもせず呑気にグローバル化時代の多文化共生(異文化と仲良くしましょう!)などといっている人々には，文化の固有性の主張がいかに危険か，まるで分かっていない。著者は，それを十分に分かった上で，つまり普遍性との緊張関係・相互作用のもとで，文化の固有性を断固守り抜こうとしているのだ。

(4)人類文化のための日本語擁護
結局，日本語・日本文学が守られなければならないのは，日本人だけでなく世界全人類のためでもある。

これは本書の結論部分であり，パトリオット水村氏の悲壮な「日本語宣言」といってもよい。結論の先取りになるが，全体の流れがわかりやすくなるので，ここで引用しておこう。

だが、これから先、日本語が〈現地語〉になり下がってしまうこと――それは、人類にとってどうでもいいことではない。‥‥［世界の人は］〈普遍語〉と同じ知的、倫理的、美的な重荷を負いながら、〈普遍語〉では見えてこない〈現実〉を提示する言葉がこの世から消えてしまうのを嘆くはずである。　人類の文化そのものが貧しくなると思うはずである。　少なくとも、日本語をよく知っている私たちは、かれらがそう思うべきだと思うべきである。　この先、〈叡智を求める人〉で英語に吸収されてしまう人が増えていくのはどうにも止めることはできない。大きな歴史の流れを変えるのは、フランスの例を見てもわかるように、国を挙げてもできることではない。だが、日本語を読むたびに、そのような人の魂が引き裂かれ、日本語に戻っていきたいという思いにかられる日本語であり続けること、かれらがついにこらえきれずに現に日本語へと戻っていく日本語であり続けること、さらには日本語を〈母語〉としない人でも読み書きしたくなる日本語であり続けること、つまり、英語の世紀の中で、日本語で読み書きすることの意味を根源から問い、その問いを問いつつも、日本語で読み書きすることの意味のそのままの証しとなるような日本語であり続けること――そのような日本語であり続ける運命を、今ならまだ選び直すことができる。（p322-323)

マルクスの「共産党宣言」は，やけに元気で明るいプロパガンダであった。これに対し，水村氏の「日本語宣言」には悲壮感が漂う。前回書いたように，「今ならまだ選び直すことができる」といいつつも，インターネット英語の「普遍語化」による日本語の死はもはや押しとどめようがない，と観念されているからに違いない。

2009/06/11　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(3)
2009/06/10　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(2)
2009/06/09　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(1)
9:57 | 固定リンク | この記事を引用 | 本
2009/06/11

書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(3)

谷川昌幸(C)

２．愛国者の「憂国の書」
水村美苗氏はパトリオット(愛国者）であり，『日本語が亡びるとき』は祖国愛に突き動かされた「憂国の書」である。彼女自身，こう述べている。

　憂国の士たちは、自らのために動いているわけではない。世のため人のためと思って、動いている。私もこの本は、我が国、我が同胞、そして我らが言葉、日本語のためと思って、書いたのである。
　海に囲まれた島国に住み、〈自分たちの言葉〉が亡びるかもしれないなどという危機感をもつ必要もなく連綿と生きてきた日本人。それが今、英語という〈普遍語〉がインターネットを通じ、山越え海越え、世界中を自在に飛び交う時代に突入した。二十一世紀、英語圏以外のすべての国民は、〈自分たちの言葉〉が、〈国語〉から〈現地語〉へと転落してゆく危機にさらされている。それなのに日本人は、文部科学省も含め、「もっと英語を」の大合唱の中に生きているだけである。
　この日本語が亡びてしまったらどうするか。百年後も〈話し言葉〉としての日本語はもちろん、〈書き言葉〉としての日本語も残るであろう。だが、真に〈叡智を求める人〉たちが、日本語で読み書きしなくなったらいったいどうするのかーーと、私の「憂国の書」は問いかける。（「著者からのメッセージ」筑摩書房HP，http://www.chikumashobo.co.jp/pr_chikuma/0812/081202.jsp）

水村氏が憂国の志士であることは間違いない。しかし，にもかかわらず彼女はアメリカに20年間も住み，英語で話し読み書きできる，そのような憂国の志士なのだ。著者は本書をこう結んでいる。

それでも、もし、日本語が「亡びる」運命にあるとすれば、私たちにできることは、その過程を正視することしかない。／自分が死にゆくのを正視できるのが、人間の精神の証であるように。(p323)

これは，貴族でありながらアメリカを旅し、民主主義の本質を見抜き，その勝利を予見せざるをえなかったアレクシス・ド・トクヴィルを思わせる語り口だ。トクヴィルは，貴族として，高貴な貴族政治の亡び行くのを直視した。

水村氏は，たしかに，パトリオットとして，亡びつつある日本語だが「今ならまだ選び直すことができる」(p323)と，情熱的に訴えかけている。しかし，それにもかかわらず，彼女もまたトクヴィルと同じく歴史の逆転の不可能を痛いほど自覚され，いかに抵抗しようとも日本語が亡びるのは運命だと観念されているようだ。そして，本物のパトリオットであるがゆえに，少なくとも亡び行く日本語からは目を背けず，恐れおののきつつも，その死に様を正視していようと，そう覚悟されているように思われる。

2009/06/10　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(2)
2009/06/09　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(1)

10:52 | 固定リンク | この記事を引用 | 本
2009/06/10

書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(2)

谷川昌幸(C)

１．A Novelist Writing in the Japanese Language
水村氏の日本語・日本文学への思いは，深く屈折している。彼女自身は，日英両語の「二重言語者」であり「バイリンガル」である。おそらく英語は読み書きも会話も完璧であろう。著者の日本語ナショナリズムは，英語が出来ない者のルサンチマン的国語国粋主義とはまったく別物なのだ。

たとえば，インターネットによる英語の普遍言語化を憂いながら，著者は自ら英語中心のホームページ（http://minae-mizumura.com/default.aspx） を開設している。タイトルは:

水村美苗 ・ MINAE MIZUMURA ・ Website
日本語で近代日本文学を書く小説家
A Novelist Writing Modern Japanese Literature in the Japanese Language

何たるイヤミか！　国語ナショナリストの著者が，自分の氏名を英語に合わせて転倒させ，しかも「日本語で近代日本文学を書く小説家」と自己規定している。英語も英米文学も大抵のアメリカ人以上に理解するが，にもかかわらず自分は日本語で書く，という自信と矜持。ヒガミ日本国粋主義とは雲泥の差だ。

この「にもかかわらず」，ウェーバー流にいえばdennoch(脇圭平訳『職業としての政治』岩波文庫，p106）こそが，私にとっては著者の最大の魅力だ。イヤミたらたら，表音主義ニホンゴ化論やカタコト小学校英語を皮肉り倒す。英語なんか選択科目にしてしまえ(p289)――著者にそういわれると，たしかにそうだと納得する。英語は選択科目でよいのだ。

英語はペラペラだが，にもかかわらず母語ではない。英語への著者の思いは，日本語へのそれと同じく，深く屈折している。そのことは，著者自身も告白している。

ご存じのかたもいるかもしれないが、私は十二歳で父親の仕事で家族とともにニューヨークに渡り、それ以来ずっとアメリカにも英語にもなじめず、親が娘のためにともってきた日本語の古い小説ばかり読み日本に恋いこがれ続け、それでいながらなんと二十年もアメリカに居続けてしまったという経歴の持主である。(p15)

「それでいながら」アメリカと英語の中で20年も暮らし，にもかかわらず母語であるが故に日本語を選択し亡び行く日本語で書く。その著者の幾重にも屈折した文化的格闘に基づき展開される日本語論，日本文学論が面白くないはずがなかろう。

2009/06/09　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(1)
11:22 | 固定リンク | この記事を引用 | 本
2009/06/09

書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(1)

谷川昌幸(C)

遅ればせながら，水村美苗『日本語が亡びるとき：英語の世紀の中で』(筑摩書房，2008）を読んだ。実に面白く，感動的。日本語への著者の深い愛情と危機感，国語政策への怒りと

どうしようもない絶望がひしひしと感じられる。魂を揺さぶられる本物の評論だ。

水村氏は，いわば国語ナショナリストであり国語保守主義者だ。日本の植民地化を阻止し，「国家国民」を形成し維持してきたナショナリズムを，その限りで高く評価し，「国語」としての日本語のかけがえのない価値(フランス語以上!)を称賛してやまない。

このようなナショナリズムや国語保守主義については，あと知恵で批判する人も少なくないが，想像力の欠如も甚だしい。つい百数十年前の幕末維新の頃のこと，例えば福沢諭吉の危機感や夏目漱石の苦悩に思い至らないのだ。水村氏のようなナショナリズムや保守主義であれば，私はこれに満腔の賛意を表したい。そう，英語帝国主義にたいし，日本語は断固保守されなければならない。

むろん，私の専門は政治学であり，言語学や文学からの評価は出来ない。専門的観点から見ると，あるいは本書にはいくつか誤りや独断があるかもしれない。しかし，たとえそうであっても，この本が問題の本質を鋭く突き，格闘していること，したがって真に読むに値する本であることに変わりはない。

著者は，漱石を深く読み込み，さらには福沢諭吉や丸山眞男もきちんと読んでいる。だから，この本は近年のどの政治学の本よりも面白い。国語学者や文学者が評価しないのなら，私はこの本を政治学の必読書として学生諸君に推薦したいとさえ思っている。

こうした観点から，以下では読書ノート風に要点を抜き書きし，紹介してみよう。直接引用部分はゴシックで表記する。

2009/06/16　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(8)
2009/06/15　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(6)
2009/06/13　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(5)
2009/06/12　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(4)
2009/06/11　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(3)
2009/06/10　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(2)
2009/06/09　書評：水村美苗『日本語が亡びるとき』(1)

2009/05/17　英語植民地の「ミサイル発射」誤報調査報告
2009/04/05　北朝鮮「飛翔体」と防衛省カタカナ英語の危うさ
2009/03/23　学生紛争と留学宣伝
2008/08/02　ベルギー言語紛争から学ぶ
2008/07/28　言語戦争へ向かうか？
20:41 | 固定リンク | この記事を引用 | 本
2009/06/03

「インドの衝撃(2)」に衝撃なし

谷川昌幸(C)
NHKスペシャル「インドの衝撃(2)，世界最大の選挙戦」(5月31日)は，優等生的つまりNHK

的であり，初回のように「衝撃」的ではない。軍事(前回)と選挙(今回)というテーマの差はあろうが，それだけではないように思う。要するに，金と時間をかけていないのだ。おそらく1/10以下であろう。

映像を見ると，はっと息をのむような場面はないし(インドには素材は無限にある)，手持ち撮影でブレているところも少なくない。 選挙戦の捉え方にしても，四方八方に遠慮し，掘り下げ不足だ。取材者側の明確な問題意識が感じられない。過度なセンセーショナリズムに走るべきではないが，濃厚味インドを「皆様のNHK」的態度で取材しても，おいしい番組にはならないだろう。

それでも，もちろん教えられるところは，いくつもあった。たとえば，ダリットを支持基盤とする大衆社会党のマヤワティ党首。ダリット出身女性でありながら，デリー大学卒業後，政界に入り，カリスマ的指導力を発揮し，ウッタルプラデッシュ州首相となった。今回の下院総選挙では勝利できなかったが，彼女が優れた政党指導者であることは間違いない。

ところが，そのマヤワティ党首は，ダリットの支持で権勢を拡大していくと，超豪華邸宅を建て贅沢三昧をしたり，自分の巨大石像を建設させたりする。ダリット出身のダリット代弁者でありながら，どうしてそのような行動をとれるのか?

この行動パターンは，ネパールのマオイストたちとそっくり同じだ。インド大衆社会党もネパール・マオイストも，被抑圧貧困人民の解放のために立ち上がり，生命をも賭して苦しい闘争を闘ってきた。そこに嘘偽りはない。

ところが，ひとたび権力の座につくと，幹部たちは，何の躊躇もなく，自分と身内の利権獲得に走り，恬として恥じない。そのアッケラカンとした利権獲得行動は，アッパレというしかない。こうした南アジアの政治家たちの行動様式はいったい何に由来するのだろうか?

「インドの衝撃(2)」には，これ以外にも教えられるところはいくつもあったが，全体としては，やはり平凡なドキュメンタリーといわざるをえない。初回はタイトル通り「衝撃」的であり，この番組には裏のスポンサーがついているのではないか，何かたくらんでいるのではないか，等々と深〜く考えさせてくれた。危なくはあるが，「スペシャル」と銘打っているのだから，初回くらいの冒険はしてくれてもよさそうな気がする。
15:44 | 固定リンク | この記事を引用 | 文化
2009/06/02

既視感と懐旧

谷川昌幸(C)

このところ既視感にとらわれることが多くなった。初めてのはずなのに，以前来たことがあるような気がしてならない。ネパールでも日本でも同じことだ。老化で「新しさ」に対応できなくなったのだろうか？

これは懐旧と同じではないが，重なる部分も多い。老化と共に，自分自身の経験したものに安らぎを覚える。既視感はそうした懐旧の情のなせる業かもしれない。

先日，大分県豊後高田市の「昭和の町」にちょっと立ち寄ってみた。数百メートル程度の小さな商店街を「昭和30年代」風に部分修復し，テーマ館「昭和ロマン蔵」に当時の物品を集め展示している。地方の小さな町のいわゆる「町おこし」である。

「昭和ロマン蔵」入場券

ところが，驚いたことに，この地味な「昭和の町」が大勢の観光客で賑わっていた。ほとんどが中高年だ。それとなしに聞いていると，「あれ！　このテレビで見ていたのよ」とか，「このバイクに乗っていたなぁ。捨てなければよかった」といった話ばかりだ。

懐旧，また懐旧。人々は，過ぎ去りし日々を思い出し，確かめ合い，夢見心地になっている。 古すぎても新しくてもいけない。自分がたしかに経験したがすでに失われてしまったもの，ちょうど50年前くらいのものが，人々の心地よい懐旧の情を誘うのだ。手回しチャンネル式白黒テレビ，オート三輪，ホンダ・ドリーム号‥‥

既視感と懐旧――愕然としつつも，懐旧ロマンの甘美な誘惑には抗しがたいものがある。日本の中高年がネパールの田舎に魅せられるのも，それ故であろう。

オート三輪とグリコ牛乳

手回し式ガソリンポンプ／昭和37年の価格

14:12 | 固定リンク | この記事を引用 | 文化